垣根越えた連携 胸に

互いの手を取り　ワークショップの最後に固く手を結んだ障害者、中国帰国者、留学生、支援者たち

■ 京都・向島ニュータウン ワークショップ「むすび塾」

高層の団地が立ち並ぶ京都市伏見区の向島ニュータウンで2月22日午前、避難ワークショップが始まった。小雨が降る中、中国帰国者は持ち出し品を携行して避難先の小学校を目指し、障害者は上階の避難部屋へ移動した。巡回ワークショップ「むすび塾」では、地域に潜む災害のリスクを共有し、住民間のさまざまな垣根を乗り越えた連携を誓い合った。

しっかりと確認　避難先への経路を確認する中国帰国者とむすび塾の参加者

過去に目を向け　むすび塾の会場には、過去に向島を襲った水害の写真が展示された

見つかった課題　避難した上階の空き部屋は、バリアフリーになっておらず、車いすの移動に課題が見つかった

■ 振り返って

危機感共有 備えの出発点

京都市伏見区の向島ニュータウンで開かれた「むすび塾」では、障害者、中国帰国者、留学生が初めて避難ワークショップに臨み、同じテーブルを囲んだ。1万3000人が暮らす巨大団地は、もともと住民間のつながりが乏しく、それぞれのグループも接点はなかった。避難ワークショップに参加した身体障害者の一人は、周囲の手助けを諦め、浸水被害が出た場合は、1階の自室で死ぬ覚悟だったという。

参加したのはごく一握りの住民だが、本音をぶつけ合い、互いの不安や不満を知る機会になった。開催を機に、かつては没交渉だった自治会役員と帰国者が、あいさつを交わし始めたという。住民の顔が分かる。これが地域の備えの出発点になるはずだ。

準備には3カ月を費やした。コーディネート役を務めた京都文教大の杉本圭子教授は「話し合いを続ける中で、相手の立場を考え、危機感を共有する下地ができた」と振り返る。テーブルを囲むまでの時間が大きな意味を持った。

ニュータウンでの議論は、さまざまな示唆に富む。東日本大震災の被災地では、新年度にかけて災害公営住宅が続々完成する。故郷や境遇の異なる被災者が集い、新たなコミュニティーづくりが動きだす。言語や障害の壁を越え、住民の融和を探る向島のプロセスは参考になるだろう。

団地の通路には、自転車や植木鉢などが置かれていた。弱視の住民から「物が倒れたり、落ちたりすると移動できなくなる」との指摘があった。視覚障害者の懸念は、夜に地震が発生し、健常者が暗闇の中で避難する際の課題に通じる。解決すれば、住民の誰もが恩恵を受ける。

（報道部・須藤喜毅）

東日本大震災 体験つなぐ

備え 大げさなほどに

東日本大震災を忘れない・被災体験を聞く会

「東日本大震災を忘れない・被災体験を聞く会」（宮城新聞社、河北新報社等主催）が石巻、京都市伏見区の2会場で開催された。宮城県内の被災者と、京都市内の被災者が、それぞれ「備え」の重要さを訴えた。

宮城県内の会場では、約100人が出席した。

「震災前は用心棒のようにいつも家にいる状態だった。震災で人間関係が変わり、地域の人とも話をするようになった。地域の人とのつながりが、いざという時に頼りになる。備えとは、人とのつながりだと思った」と、中国帰国者の男性（36）は、大震災を振り返った。

「自閉症の息子が、津波は来ないと思い込んでいたため、地震直後に自宅を飛び出してしまった。いざという時に頼りになるのは、やはり人とのつながりだと思った」と、中国帰国者の女性（61）も、母親を亡くした経験を交えて、地域とのつながりの大切さを強調した。

「地震直後は、仮設住宅の内部はコンクリートの壁で、住民交流の場がなかった。ボランティアの方が、ラジオ体操などを通じてコミュニティーを作ってくれた。今、住民同士で助け合っている。ありがとうございます」（宮城県内の被災者）

京都市内の会場では、約70人が参加した。

「阪神・淡路大震災の教訓を生かし、地域の人とのつながりを強めたい。『顔の見える関係』を築くことが、防災・減災の第一歩だと思う」と、京都市内の被災者の男性（70）は、大震災を振り返った。

「震災直後は、ボランティアの方が、ラジオ体操などを通じてコミュニティーを作ってくれた。今、住民同士で助け合っている。ありがとうございます」（京都市内の被災者）

東日本大震災を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には地域と人、人と人の結び付きを強め、防災・減災に結び付けたいとの思いを込めました。次回はこれまでの「むすび塾」開催地の中から、関係者5人に参加してもらい、座談会を開きます。

京都新聞社 こう伝えた

京都市伏見区の向島ニュータウンで開催した巡回ワークショップ「むすび塾」と避難ワークショップは、京都新聞社と共催した。防災・減災の浸透を図るため、京都新聞社は2月17～19日の連載記事で、甚大な津波被害を受けた東日本大震災の被災地と、内陸部に位置する向島との共通課題を紹介。22日には「被災体験を聞く会」を掲載し、語り部の教訓を伝えた。むすび塾開催の翌23日と24日の特集では、避難ワークショップや話し合いの中で浮き彫りになった問題点と、ばらばらだった住民が歩み寄る姿を報じた。地域の犠牲を少なくするすべを、住民と一緒に模索した紙面の一部を紹介する。

宮城の震災被災者から教訓学ぶ

中国帰国者や障害者らも参加

情報の「壁」解消へ訓練

避難誘導「地域全体で」

命守る課題 地域で共有

言葉の壁 誰が誘導？

狭い階段 4人がかり

京都で大地震・宇治川氾濫…どう避難